

239. 須恵器製作技法を採用する埴輪 — 五之里古墳出土遺物から —

1. はじめに

筆者は、平成5年5月から6月にかけて野洲町大字五之里にある、五之里古墳の隣接地を発掘調査した。

当調査地は現況が墓地であり、その拡張工事に先立ち調査を実施することになったが、五之里古墳の周溝部にあたると思われたため^①、慎重作業を要した。

結果、五之里古墳の周溝部とみられる遺構から、埴輪や須恵器が出土したが、それらの概要は報告済みである^②。

その報告書の中でも述べている通り、これらの埴輪は破片が多いためその判別は困難だったが、ほとんど

が円筒埴輪片と思われる。ところが、一般的にみられる円筒埴輪ではなく、あるものは焼成が須恵質で淡青灰色をしており、またあるものは表面にタタキ技法を用いたり、内面に同心円状の当て具痕があるなど、須恵器製作技法を用いた特殊な埴輪である。

この調査は、平成5年度野洲町内遺跡国庫補助対象事業であったため、報告書作成までの期間や頁数に制約があり、十分な整理や研究ができなかったが、その後の詳細な検討により、今回の資料が得られたのでここに紹介するとともに、より詳しい検討も行ってみたいと考えるのである。

2. 五之里古墳の概要

先ず最初に、五之里古墳の概要を簡単に説明する。

五之里古墳は、現況でも周辺水田より1m以上の比高差をもち、その墳形から推測して仮に円墳であると



第1図 五之里古墳とその周辺図

すれば、直径約20m、周溝を含めると35mを超える規模を有している。

そもそも、この小丘が古墳であると裏付けられる契機となったのは、昭和51年に県教委が行った調査で多くの埴輪片が出土したことによる③。

一方、周辺状況であるが、500m程東に方位をとると、そこには有名な古富波山古墳や富波古墳、亀塚古墳がある。南から南西方向200m程には、前掲調査で弥生から古墳時代の方形周溝墓が多数みつがっている。また同様に東へ100m程の所には竪穴住居群も検出されている。

このように、非常に遺構密度の高い場所に五之里古墳は存在しており、集落域と墓域の区分や関わりを考えるうえで重要な要素となっている。

3. 出土遺物の検討

(1) 須恵器

今回の調査において埴輪と共に出土すると思われる須恵器は以下に述べる3点である。これらは、年代決定基準の大きな要素となるだけに、報告書の中でもとりあげたが、ここでも改めて紹介し参考とした。

①、②は甕の口縁部であろう。ともに黒灰色を呈し、内外面ともに丁寧なヨコナデで仕上げられている。復元口径は約35cmにもなる。

③は器台の口縁部である。口縁部は大きく外反し、その下に波状文を施す。そして2条の凸線の下にもまた波状文をなしている。復元口径は約28cmになる。

これらの須恵器は、その形態や特徴から、おおよそ初期須恵器の範疇に入るものと思われるが④、いずれも小片の為、これ以上の言及は差しひかえない。

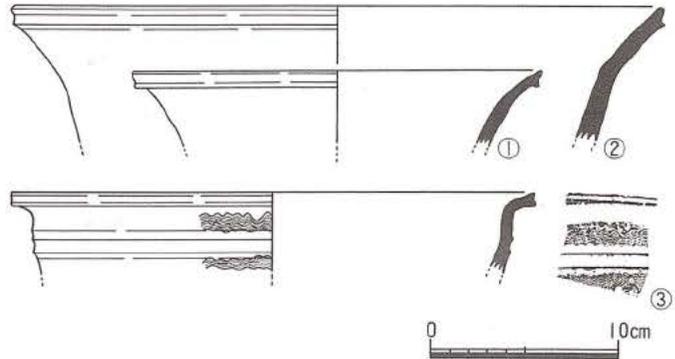
(2) 埴輪

埴輪は今回17点とりあげた。恐らくすべて円筒埴輪片であろう。尚、1～8は前掲書②で報告済、9～17は今回新たに加えた資料である。

1～6は土師質のものである⑤。1、2は、ともに乳褐色を呈し、外面に×印のヘラ記号をもつ。ヨコハケの外面調整や色調、ヘラ記号の形や施し方から、同一工人の作業を予測させる。また2の方はわずかに、1の方は、明瞭に赤色塗彩を施している痕跡が窺える。

3～6は濁乳灰褐色を呈する。外面は、いずれもヨコハケ調整である。3、5の内面は摩耗しているが、ナデを用い、4、6はわずかにヨコハケ調整もみてとれる。3、6はタガ下部に透孔を有している。またタガの形状は、いずれも断面M字形だが、シャープさには欠けている。

7、8は須恵質である。7は淡青灰色、8は明灰色で、ともに外面はヨコハケ、内面はナデ仕上げである。



第2図 五之里古墳出土須恵器(S=1/4)

7の上部、8の下部には、わずかにタタキの痕跡がみられる。

次に、9～17の新資料であるが、これらのうち、12、13、17が須恵質、その他が土師質である。

9は、かなり摩滅が激しく、乳灰色に近似している。いわゆる「生焼け」に近いもので、外面に一部ヨコハケの痕跡が残るのみで、調整すら判別できない。

10は、淡灰褐色を呈する。タテ方向のタタキ目が外面にみられるが、内面調整に関しては不明である。比較的タガの断面形態はシャープである。

10と同様の色調を帯びる11は、外面にヨコハケを施したのち、それに直交する形でタテ方向のタタキを行っている。下部には円孔の一部がみられる。内面は摩耗が激しいが、わずかに青海波文が残っている。

12は完全な須恵質を呈している。淡青灰色で焼成状態もよい。タガ下部には透孔らしき一部が残存している。内面は丁寧にヨコナデを用いているが、それに反して外面は、タタキの痕跡をほぼそのまま残している。

13も須恵質で、円筒埴輪の上端部と思われる。12と同様の色調だが、外面はヨコハケで調整を行っている。

14は乳灰色に近似し、焼成度は良くない。外面はタタキ、内面には同心円状の当て具痕がみられる。また円孔の一部もみられる。

15は淡乳灰褐色をしている。内面には当て具痕が、外面にはヨコハケののち、タタキが施されており、そのタタキはタガにも及んでいる。結果、完全に扁平化している。16も若干の色調の違いのみで、その他は15に準ずる。

最後にとりあげる17は、青灰色を呈し還元の色合いが十分であったことを窺わせる。基本的な内外面の調整は15や16と同様であるが、外面は格子状になり、その状況には目を見張るものがある。下部には、円孔らしきものもみられる。

以上、今回の遺物についての概略を述べてきた。次章では、これら須恵器製作技法を用いた埴輪を中心に若干の考察を試みてみたい。



第3图 五之里古墳周溝部出土埴輪(S = 1/3)

4. 製作技法とその特徴

埴輪製作にタタキや青海波文などの技法を用いる代表的な例は、大阪南部岬町の淡輪技法を思い出させる^⑥。

その淡輪地方宇度墓古墳出土の埴輪には、タガにまでタタキが及び、そのタガ断面が偏平化している例や格子目状のタタキを施しているものなど(第4図)、五之里古墳のそれと極似している例が少なくない。

一方、五之里古墳出土埴輪のその他の特徴を挙げると、①土師質のものが多くを占める②赤色塗彩を施している例もみられる③作りが粗雑等がある。

川西氏は上述の論文の中で「窖窯の導入期の埴輪に土師質が多かつ色調が明暖色である原因は、技術の未習熟にあるというよりも、埴輪に対する当時の色彩上の根強い観念にあったとみるべきであろう。外面に赤色の顔料を塗布しているのはこうした色彩観念のあらわれであろう」と述べておられる。^⑦

このような観点からすると、淡輪地方の西陵、宇度墓、西小山の各古墳にみられる「須恵質で暗寒色」を呈する円筒埴輪と、五之里古墳出土の埴輪の特徴とは差がみられることになり、淡輪の埴輪の特異性に比べて、①、②、③の特徴を有する当古墳の埴輪がより一般的要素を多く内包している事実も見逃してはならない。

現在、淡輪技法がみられる埴輪は、北部九州、伊勢東海、北陸地方である。

いずれも、底部に段を有する淡輪独自の形態をとるが、外面のタタキや内面の青海波文を残すものはほとんどなく、時代も下がるものが多い^⑧。

上述した淡輪地方の埴輪は、もちろん底部に段をもっているが、その他にもタタキや青海波文の痕跡を残すものが多く含まれている。

そういった意味からも、今回出土した五之里古墳の埴輪は、段をもつ底部がみつかっていないという主因子を欠き、明暖色で土師質の埴輪が多いけれども、タタキがタガに及ぶことや格子目タタキを用いている点、時代が近接していることから、『淡輪類』である可能性を大いに示唆してくれるのである。

5. 小 括

従来の埴輪作りに新たな息吹を吹き込んだ須恵器生産とその技術は、その生産開始当初より有機的に埴輪生産と結びついてきたことは周知のこととなっている。

今回、当古墳出土の埴輪はそれを明瞭に示す事実を我々に提供すると同時に、その度合が非常に高く須恵器工人が窖窯を使った焼成部門だけでなく、生産段階から埴輪生産に関与していた状況を呈示している。

それゆえ、「これほどはっきりと須恵器製作技法を用いたことを示す埴輪は県内においてもほとんど類例がない^⑨」という特異性だけを論じるのではなく、上述し



第4図 淡輪宇度墓古墳出土埴輪
(本文註⑥文献より転載)

たことを踏まえ、今後は須恵器生産と埴輪生産の相互関係や須恵器生産体制の成立過程などの問題に適用させていくことが不可欠とされよう。

なお、本文をまとめるにあたり、和田晴吾、菱田哲郎、古川与志継、花田勝広、杉本源造、鈴木敏則、岩崎茂、伴野幸一、畑中英二、鈴木康二の各氏にお世話になり、多くの御教示をいただいた。末筆ではあるが記して感謝の意を表したい。(角 建一)

註

①『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1977年において、墳丘をはさんだ反対側でトレンチ調査を実施しており、その結果を踏まえて今回の調査に着手した。

②『平成5年度野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町教育委員会 1994

③前掲①報告書を参照

④おおよそTK216型式に相当すると思われる。これらの須恵器は埴輪も含めて立命館大学教授、和田晴吾氏に実見していただいた。記して感謝いたします。

⑤ここでの土師質とは、「須恵質ではないもの」という意味で便宜上用いたものであり、これら土師質の埴輪片がそのままいわゆる土師器の類と同様の性格を指し示しているということではない。

⑥川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号 1977

⑦前掲書⑥

⑧鈴木敏則「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第46巻第2号 1994年によると、静岡県天竜市光明山古墳出土の埴輪片らしきものにタタキの痕跡がみられるという。一方、内面の同心円状の当て具痕は、これら各地の淡輪系埴輪に共通してみられない。なお遠江の淡輪系埴輪の実見の際、鈴木氏には大変お世話になりました。感謝いたします。

⑨1990年、守山市教育委員会によって調査された下長遺跡の調査で、旧河道から出土した円筒埴輪2点の最下段に、部分的ではあるがタタキの痕跡がみられる。しかし、内面はハケやナデで仕上げている。なお、これらの資料の実見で岩崎茂氏、伴野幸一氏にお世話になりました。御礼申し上げます。守山市教育委員会『下長遺跡発掘調査報告書III』1993